

緑内障 早期は目薬で

眼科

今回は、眼科の治療を取り上げた。

目の病気は年齢を重ねると増えてくる。治療法は日々進歩している。一覧表には、2018年に行われた「糖尿病網膜症などの硝子体手術」「白内障の水晶体再手術」「緑内障の手術」の各実績を載せた。

病院の実力

*愛媛編 137

病院の実力「眼科」
医療機関別2018年治療実績
(常勤専門医は2019年4月現在、
読売新聞調べ)

医療機関名	①硝子体手術 (件)	②白内障の水晶体再手術 (件)	③緑内障手術 (件)	④常勤専門医 (人)
徳島県				
徳島大	384	320	173	11
香川県				
香川大	588	1080	172	9
白井	351	1340	103	6
高松市立みんな	14	256	0	1
高松赤十字	5	502	15	1
県立中央	0	384	0	1
小豆島中央	0	380	0	0
香川労災	0	219	0	1
県立白鳥	0	180	0	1
愛媛県				
松山赤十字	255	1011	33	2
南松山	178	778※	114	2
市立宇和島	121	1032	76	2
高知県				
高知大	145	395	66	7
高知医療セ	16	106	0	1
県立あき総合	0	124	0	0

「セ」はセンター。※「南松山」は硝子体手術、緑内障手術の同時手術を含む。

力が低下したりする。眼球に3〜4か所の穴を開け、器具を入れて血を取り除くなどの硝子体手術を受けることになる。傷ついた網膜を治したりもする。設備やスタッフの技量が重要だ。白内障は、目の中でレンズの役割を果たす水晶体が老化などで、濁ってくる病

気だ。初期は、症状の進行を抑える目薬を使う場合もある。視力低下などの症状で生活に支障が出てきたら、水晶体を取り除き、人工の眼内レンズに置き換える手術を受けることになる。眼球は、内側から外側に圧力(眼圧)がかかっている。眼圧が高まり、目の奥にある視神経が傷つき、視野が狭まるのが緑内障だ。早期では、眼圧を下げる目

薬が治療の中心となる。目の手術をする。薬の効果が十分でなければ、眼圧上昇を抑えるため、療を提供する体制の目安となる。なる、日本眼科学会認定の専門医の常勤数も示した。

南松山病院
田坂嘉孝眼科部長



(聞き手・福永健人)

硝子体手術について教えてください。

眼球の中は「硝子体」と呼ばれる卵の白身のような組織で大半が満たされています。カメラのフィルムにあたる「網膜」のそばにあり、出血などで濁ると視力が低下します。手術の対象となるのは、糖尿病の合併症である糖尿病網膜症や、網膜が眼球の壁から剥がれる「網膜剝離」、網膜の中心に穴が開く「黄斑円孔」などの患者です。眼球に3、4か所の小さな穴を開け、出血や混濁を取り除いたり、傷んだ網膜を修復したりします。

白内障はどのような人がかかりますか。
白内障の原因で最も多いのは加齢に伴うもので、早ければ40歳代から

眼底検査 定期的に

発生し、80歳以上になるとほぼ100%発症します。先天性や外傷によるもの、糖尿病やアトピー性皮膚炎など全身疾患に合併して症状が出る場合もあります。白内障になると、かすみやまぶしさ、視力低下などを引き起こします。手術で濁った水晶体を摘出し、人工の眼内レンズに置き換える手術が必要になります。

一定の距離にピントが合う「単焦点レンズ」、近くと遠くの両方に焦点を合わせることを目的とした「多焦点レンズ」、乱視矯正を目的とした「トーリック眼内レンズ」があります。多焦点レンズは眼鏡をかけたくない人にとってメリットといえますが、保険適用外で、先進医療の枠組みなので高額になります。ただ、単焦点でも眼鏡と組み合わせれば、ピントが合わない距離を補えます。眼内レンズを選ぶ際は、目の状態や普段のライフスタイルを基に医師とよく相談してください。

日本人の40歳以上の20人に1人が緑内障にかかっているとされます。緑内障の大半は慢性で自覚症状に乏しく、早期発見が鍵です。検診やドックなどで眼底検査を定期的に受けることをお勧めします。